

日本におけるフーゴ・リーマンの機能と声理論の受容

西田紘子, 仲辻真帆

フーゴ・リーマン (1849-1919) は、機能と声理論を体系化した理論家とみなされてきた。その書物は、ヨーロッパを超えてさまざまな言語に翻訳された (西田, 安川 2021)。近年、アジア諸国における西洋音楽理論の初期受容に関する研究が盛んになってきている。とりわけリーマンの『音楽学提要』(1908年)は日本では1910年代に紹介されたが(鈴木 2019), リーマンの機能と声理論の受容は明らかになっていない。一方で、彼の言説に関する研究の進展とともに (西田, 安川 2019, 西田 2019), リーマン受容への関心も高まりつつある。

そこで本研究は、明治期から昭和期にかけて、日本でリーマンの機能と声理論がどのように受容されてきたかに照準する。森田・松本 (2008) や仲辻 (2019) の研究では、大正期の和声学の書籍 (田中 1920) がリーマンに言及しているが、リーマン風の機能的思考や用語法は昭和期の書籍 (諸井 1941) まで明確に導入されていないことが示されている。本研究では、和声に関する書籍 138 冊と、音楽取調掛・東京音楽学校で明治期から昭和初期 (1880 年代-1930 年代) に授業で使われた教育史料を調査した。その結果、TDS (tonic と dominant と subdominant の頭文字) に基づくリーマンの機能と声は、書籍においては 1920 年代に受容され始め、東京音楽学校の作曲部では 1930 年代から和声二元論とともに教授され始めることが明らかとなった。1930 年代以降、リーマンの機能と声理論は日本の著述家たちによって広められていくが、それらの多くはシュテファン・クレール、ヴィルヘルム・クラッテ、ルドルフ・ルイ&ルートヴィヒ・トゥイレのようなドイツの書き手による「間接的な」リーマン受容に基づくものだった。日本におけるリーマン受容の間接的な傾向は、今後、ドイツ語圏やほかの国々における傾向と比較されうる。